

NEZASU

教育研究所ニュースレター No.7 1993年9月

発行：神奈川県高等学校教育会館・教育研究所 〒220 横浜市西区藤棚町2-197 電話：045-231-2546

現代青年論

——青年期の生き方と大人世代との関係——

研究協力員 菅 龍 一

青年期と原体験

今年6月15日、私は上記の表題で「教師のための教育講座」で話をした。質問もたくさん出たし、講座後のコーヒータイムに残って話していった方も多かった。しかし聞いて下さったのは組合員の1%にも満たない数である。広く組合員の皆さんに考えていただくため、その内容を多少角度を変えて書いてみたい。

「現代青年論」というのは私が和光大学で行っている講義名である。神高教組合員の頃は物理の教師であった私が、なぜこんな講義をするようになったのか。まずはそんな話から始めてみたい。

今から十数年前、私は「教職課程」という雑誌に教育現場のエピソードを連載していた。連載の中頃、読者の反応を知りたいと思い読者会を開いた。その席で教師志望のある学生がこんな発言をした。

「先生のような現場感覚を持つ人が、大学の教職課程の講義で教えるべきですよ。この連載のような話を学生は聞きたいんです。」

私はなるほどと思い、連載のコピーを知人の大学教授に送った。すぐ反応があり出講を誘われたのが和光大学だった。定時制勤務だった私は空いていた昼間に出かけることにした。最初の年は「教育学」という名称のついた講義だった。学生は熱心で手ごたえはあったのだが、学年末のレポートを読んで私は首をかしげた。そこにはこんな文章が何通かあったのである。

「先生の教育実践の話はとても面白い。しかし自分が教師になったとき、そのようにやれるかどうか不安である。先生が成長過程で身につけたものが、私たちには欠けているのではないだろうか。」

その頃、私は神奈川教育文化研究所（神教組）で「親と教師のための教育相談室」の仕事を始めていた。ここでも思春期青年期の相談が寄せられていたが、私が送った青年期とは異なる状況があらわれていた。農山村の大家族から都市型核家族へ。自然の中での集団遊びから、テレビゲームに象徴される密室型一方通行の遊びへ。偏差値教育の徹底。こうした変化の中で若者たち自身が「先生が成長過程で身につけたものが、私たちには欠けている」と感じているのである。

では彼らに欠けているものとは何だろうか。それは青年期以後の生き方や職業選択の基準になる原体験ではなからうか。私は中学高校時代を山陰海岸の禅寺で過ごし、周囲の自然と村落共同体の人間関係の中で多くの体験をした。また高校は総合制だったので工業科や農業科の友人たちと科学部や演劇部の中でユニークな原体験をしている。こうした原体験が私にその後の人生設計をさせるのだが、現代の青年にはそれが無いことが判ってきたのだった。

青年期と演劇

現代の若者の青年期の過ごし方に問題があると気づきはじめて私に、和光大学から実にタイミングの良い誘いがあった。「現代青年論」という講義を担当しないかという話だった。私は喜んで引き受けることにした。この講義が二年目に入った頃から、私は演劇的手法を大胆に取り入れるようにした。今では講義の後半は学生がグループに分れて創作戯曲を書き、最終授業ではそれらの作品を上演または読み合わせをするようになった。

このような授業展開になっていった理由は、私自身の創作体験、とりわけ高校生と取り組んだ創作劇や創作ミュージカルの実践があったからである。さらに学生たちが戯曲を書き上演するという過程が、彼らにとっても良い原体験になると考えたからである。事実、この講義で初めて戯曲を書いた何人かの学生が、その後学外の劇団の書き手となっていった。

さらに青年期の生き方と演劇の持っている本質的な類似点を私は意識していた。青年期を心理学的に見ると、それまで大人によって保護されていた居場所（アイデンティティ）を離れ、自分の信ずる居場所を発見する過程でもある。子供の居場所を支えているのは、主として親である。ふつう親は子に対して「勉強する丈夫な良い子」であって欲しいと願っている。その親の期待に沿うよう努力することによって子供のアイデンティティは保障されているのである。

だがこの心理状態をいつまでも続けていたのでは大人になれない。思春期青年期の特徴の一つは、親の期待の中にこめられた価値観を疑う心理が芽生えることである。勉強する丈夫な良い子であれというのは、単なる親のエゴイズムではないのか。もっと人間らしい別の生き方があるのではないかと考え悩み、やがて自分なりの価値を発見するに至る。その価値観に従って職業や生き方を選択することによって青年は大人になるのである。

これは世間や大人が持っている常識の否定であり、新しい価値の発見でもある。常識の否定と価値の発見。これこそ演劇の本質なのである。たとえば科学史上の出来事で、最も劇的な発見といえば、多くの人が地動説を上げるだろう。劇的と同義語のコペルニクスの転回という言葉さえある。世間の常識（天動説）を否定し、新しい真理を発見したから劇的なのである。

多くのすぐれた戯曲は青年を主人公にしている。それは青年の生き方自身が劇的だからである。学生たちもこのことを理解し、「現代青年論」の中で多くの創作戯曲が生れていった。

青年期と実年期

創作劇が授業の中心になったころ、私の囲りで衝撃的な事件が起る。商業演劇のプロデューサーであった

友人の自殺である。同じ頃、筑波研究学園都市で一年間に十名ほどの研究者が自殺した。彼らもその頃の私や友人と同じ実年期、五十歳前後だった。私はすぐれた戯曲には青年とともにこの年齢の主人公が登場することを思い、彼らもまた劇的な人生の岐路に立たされ悩んでいるのではないかと考えた。

この年、私は理科系の友人を頼って筑波研究都市に調査に行くことになった。学生たちに話すとき十名以上の者が同行したいと言った。私たちは単身赴任の研究者が宿泊する施設に泊り、研究者たちと話し合った。その結果判ったことは実年期が心理学的に青年期によく似ているという事実だった。

亡くなった研究者はその分野では一流の人たちばかりだった。だが自然科学は日進月歩の世界で、研究者にとって残酷な面がある。ある日、大学院を出て2～3年の若い部下にこんなことを言われる。

「僕の研究に対してアドバイスをして下さる気持はよく判りますが、本当のことを言わせてもらおうと、あなたの意見はいつもピント外れなんです。僕の研究、つまり今の最先端の研究が、あなたにはもう理解できてないんじゃないですか」

一流の研究者としてのプライドが傷つき、指導者としての能力も疑われる事態になる。さらにこうして研究者の子供がえてして怠学や非行に走ることを、私は定時制生徒の親子関係の中で数多く見てきた。週末に家に帰ると思春期の子供が反抗する。こんなとき妻は子供の側に立ち

「あなたが単身赴任で、子供とろくに会話をしなかったから、こうなったのよ！」

と自分を非難する。職場と家庭の双方での深刻な居場所崩壊である。実はこれは研究者に限ったことではない。教師の中にも実年期の居場所崩壊があることを、その頃の私は身をもって実感していた。

筑波の調査を境にして青年期と対置して実年期を描く学生たちの作品が生まれた。彼らにとって親世代の生き方は興味ある主題だった。中には実年期の男性と青年期の女性の自殺を、心中という形で一挙に構成した戯曲もあらわれた。これが実にシリアスな美事な作品だった。

暗い話になったので、最後は展望のある話題でしめくりたい。実年期の親と青年期の子供が同じ心理的状況にあるのは、天の配剤というか、むしろ救いなのである。この時期の子供は保護してくれる親ではなく、自分と同じように人生に悩みながらも、崩壊した居場所の再確立に努力する親の姿を見たいと望んでいる。「親と親師のための教育相談室」の回答を、私はこんな文章でしめくくる。

「この時期の親子関係は、たしかに辛いものです。しかし子供から目をそらさず、彼らに堂々と胸を貸してあげて下さい。子供は親と対立したり和解したり、それをくり返ししながら、親を人生のお手本として自己を確立するのです。親にとっては最後の親業であり、ここを通過してはじめて一人前の親になるのです。そしてそれ以後の親と子は、人生の戦友としてお互いに理解し、助け合える存在になるのです。

禅僧であった父と私との関係、また私と二人の子供との関係をふり返ると、この通りであったと断言できるのである。

私の高校時代の原体験、教師になってからの高校生との創作劇の営み、実年期の教師の苦悩と再生などについて、もう少し触れたかったのだが紙数が尽きた。幸い私の最新著「子どもが心を開くとき」（一ツ橋書房）で、これらの主題について詳しく書いた。「共同時空」(No.8 7月10日)で永田裕之先生に書評をしていただいた本である。今回の文章に興味を持たれた方は、併せて読んでいただければ幸いである。

(すが りゅういち 和光大学講師、作家)

教育研究所パネル・ディスカッション

今、高校入試を考える

日時 10月16日(土) 14時より17時まで
会場 全労済神奈川会館 5階会議室
新横浜駅より徒歩3分(地図参照)

パネリスト ・浅井良夫(中学校教諭)
・小山晴美(新磯高校)
・交渉中
司会 ・研究所所員

神奈川の高校入試は今、大きく変わろうとしています。

神奈川県に置かれた高等学校教育課題研究会は、今年5月に「高等学校(全日制)への進学機会のあり方について」(第一次報告)を出し、今年中に第二次報告を出すと言われています。パネル・ディスカッションでは立場や意見の違う三人の方の討論を通じて高校入試をめぐる問題点を浮き彫りにしたいと考えています。

参加はどなたも自由です。

主催 神奈川県高等学校教育会館教育研究所
共催 神奈川県教育文化研究所
問い合わせは神奈川県高等学校教育会館教育研究所まで
Tel 045 (231) 2546

